

パリから見えるこの世界

Un regard de Paris sur ce monde

第36回 記憶の探索、あるいは「考える」という精神運動

矢倉英隆

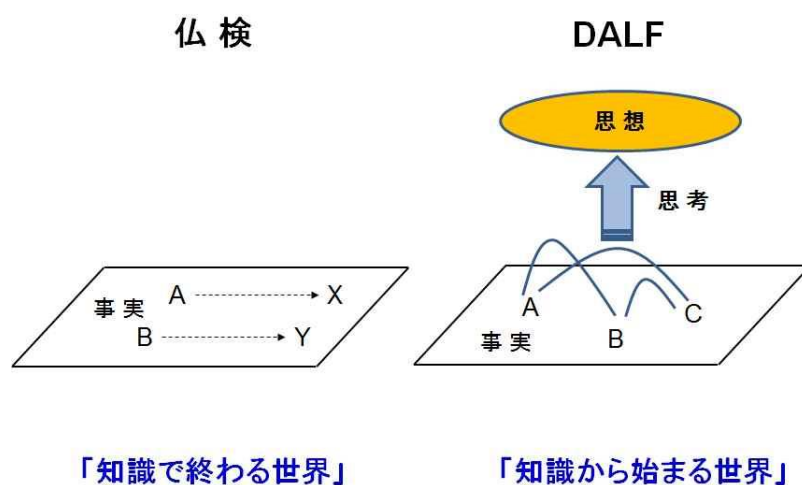
「出来事を調べるのは科学です。けれども、歴史家は人間が出来事をどういう風に経験したか、その出来事にどのような意味合いを認めてきたかという、人間の精神なり、思想を扱うのです」

——小林秀雄

われわれは日常的に「考える」という言葉を使い、時に「よく考えなさい」などと言ったりする。しかし、その内容についてどれだけ具体的なイメージを持っているだろうか。わたしの場合、こちらに渡って数年が経過した時、それまで「考える」ということを意識的にやって来なかったのではないかという疑念を持つようになった。より正確には、「考える」とはどのような運動なのかについて考えたことがなかったことに気付いたのである。今回は、個人的な経験から現在までに辿り着いた「考える」という精神運動の中身を紹介しながら、この問題について考えてみたい。

今から振り返ると、「考える」ことについてうっすらと意識したことがあった。もう10年以上前になるが、何気なく手に取った丸谷才一(1925-2012)著『思考のレッスン』(文藝春秋、1999)の中で「見立て」という言葉を目にした時である。「見立て」とは、同種のもものが別の外観で存在することを発見したり、同類を見つけて同類項に入れることを指している。その時、この「関連付け」の作業こそ、考えることの中身かもしれないと思ったのである。アンドレ・マルロー(André Malraux, 1901-1976)も「頭によさとは、今まで誰も結び付けたことのないものを結び付ける力である」と言っている。その後、ショーペンハウアー(Arthur Schopenhauer, 1788-1860)が精妙な判断力を持つ頭脳として、次のような条件を挙げていることを知った。一つは、経験した中から重要な意義深いものを記憶に定着させ、いつでも引き出すことができること。二つ目は、問題の要点とか、それと類比的な事柄とか、その他何かそれと縁のある事柄を、なかなか他人の気付き難いことでも、好機に思い付くこと、・・・一見極めて離れ離れな物事においても、同一のもの、従って互いに連関するものを直ちに見分けられることである。これも「関連付け」である。ただ、それから先に考えを進めるところまで

は行かなかった。



仏検とDALFの比較

そして50代の半ば、それまで全く興味のなかったフランス語に目覚め、その進捗状況を診るために検定試験を受けることになった。一つはフランス語教育振興協会がやっている日本の仏検で、もう一つはフランス国民教育省認定の DELF、DALF と呼ばれる試験であった。最初は仏検だけだったので気付かなかったが、DALF を受ける頃には両者の間に大きな違いがあることに気付き、驚いたのである (図参照)。その印象を纏めるとすれば、仏検はフランス語の知識を診る試験で、単線的、静的で、思考の必要がない。そのためすべてが小手先の運動に終始し、体全体の悦びを感じない。事実を知らなければ、それで終わりの世界である。一方の DALF はフランス語を使った思考を診るもので、事実の間の「関連付け」が求められ、ダイナミックな精神運動が起こる。そこに思考する自由と悦びを感じ、最初に DALF を受けた時には体全体が反応して驚いたことを思い出す。後に仏検的な世界を「知識で終わる世界」、DALF 的な世界を「知識から始まる世界」と命名し、これからは「“知識で終わる世界” から “知識から始まる世界” へ」の転換が求められるのではないかと考えるようになった。後述するわたしの活動のモットーとしてこのフレーズを取り上げたのも、そのためである。

「考える」ということについて意識的に探るようになったのは、こちらに来て全くの偶然から始めた精神運動が切っ掛けになっている。ある夏の日、目を瞑り、ぼんやりしているとどこからともなくイメージや言葉が浮かび上がってくることに気付き、

それと繋がるものを自らの記憶の中から次々と拾い上げるという作業を繰り返すことがあった。暫くして、これを瞑想 (médi-tation) と呼ぶようになった。宗教的な瞑想は無の境地を目指すとも言われるが、わたしの言う瞑想は寧ろ精神が活発に活動している状態を指している。さらに別の機会には、最初に一つのテーマを決めて同様の作業をすることもあった。こちらは省察 (réflexion) とし、これがわたしの中での「考える」ことの実態となった。つまり、一つのテーマについてそれと繋がりのある事実を自らの記憶の中から探し出し、それらを関連付け、一つの新しい塊を創り上げるという運動である。その詳細は「瞑想生活のある医学」と題してすでに発表しているので、そちらを参照していただければ幸いである (*THE LUNG perspectives* 22: 106-109, 2014)。

瞑想と省察を繰り返す中で、目を瞑ること、あるいはぼんやり眺めることが「もの・こと」の全体に迫る上で欠かせないことにも気付くようになった。逆説的だが、目で見ることが全体を観ること、考えることを阻害するのである。詩人で劇作家の寺山修司 (1935-1983) は、次のように言っている。

「見るという行為は、人間を部分的存在にしてしまう。もし、世界の全体を見ようとしたら目をとじなければ駄目だ」

瞑想や省察においては自らの記憶の倉庫の中に入り込み、そこを動き回る。時には長い間手が付けられていなかった物陰に隠れているような品まで見付かることがある。普段は無意識の世界に眠っている記憶と言ってもよいものである。これらの運動をする中で、この自分が頼ることのできるものはそれまでに蓄えられている記憶だけではないかと考えるようになった。換言すれば、自己を規定しているのは自らの記憶の総体ではないかということである。この考えは、シリーズ第 17 回 (245 巻 10 号) で触れた「これまでに在ったすべての自分を現在に引き戻して生きようとする」こととも繋がっている。われわれがこれまでに読んだもの、聴いたもの、観たものなど、外的世界の断片が記憶の中に詰まっている。それだけではなく、それらの断片に触れた時に感じたことや自らが発した言葉などの膨大な情報が蓄えられている。「自己とは記憶の総体である」というフォルミュールに一片の真理があるとすれば、次のようなことが言えそうである。

デルポイの神殿に刻まれていたという「汝自身を知れ」という言葉がある。ソクラテスが頻繁に取り上げた哲学の源流にあるこの命令を実行することは、困難を極める

道に見える。しかし、われわれはそこに向かわなければならないのだろう。もし自己が記憶の総体ということになれば、己を知るためには記憶の中を意識的に探索しなければならない。普段は日常を乗り切るために必要な記憶しか動員されず、その底に眠っているものには達しないからである。記憶の探索により引き出されるものは、それを行っている「いま」に規定されてくる。「いま」の心的状況に結び付くものが引き出されやすいからだ。したがって、「いま」の機会が多くなればなるほど、多様な内なる世界と同時に己に反映された外的世界を目にすることができるようになる。もしこの営みがうまく行くことになれば、新しい自己を創り上げる切っ掛けをもわれわれに与えてくれる可能性が出てくるだろう。そこで必須になるのが、いくら強調してもし過ぎることのない探索のための時間の確保である。忙しく動き回ることが誇るべきこととなっている現代において、自己に迫ること、考えることが如何に難しいことかが見えてくる。

先日、このことに関連する経験をすることができた。わたしが帰国の度に行っている小さな試みがある。2011年から始めたサイファイ・カフェ SHE と今年の春から始めたカフェフィロ PAWL である。サイファイとは Science-Philosophy の Sci-Phi を英語読みしたもので、SHE と PAWL はそれぞれ Science and Human Existence (科学と人間存在) と Philosophy As a Way of Life (生き方としての哲学) の頭文字を採ったものである。昨年、この二つの営みのベースとして、サイファイ研究所 (ISHE: Institute for Science and Human Existence) というバーチャルな場を創設し (<http://science-he.blogspot.fr/>)、そのスローガンを上掲した「“知識で終わる世界” から “知識から始まる世界” へ」とした。カッコ付きで言えば、前者は科学で、後者は哲学や歴史の世界になるだろう。この会でのわたしの役割は事実を提示することで、その事実を基に時間をかけて思考を進めるのが参加者の役割ということになる。当初はそのことが見えなかったが、先月 8 回目の SHE と 2 回目の PAWL を終えたところで、これは「共に考える」ことの実践であると実感できるようになった。そこでは一人の記憶を基にした思索ではなく、参加された人の数だけの記憶が動員されるので予想を超えた広がりを見せる。当然とも言えるそのことに感動したのである。このような場はそれぞれの職場や生活の中にもあるはずだが、「共に考える」営みに参加するという意識を持つことができるかどうかで結果は大きく変わってくるだろう。

ここで、この問題を意識との関連で考えてみたい。意識の実体を捉えることは神経科学、認知科学、心理学、哲学、宗教などの幅広い領域を巻き込む大きな問題で、古

くから多くの考え方が出されている。現代を例に採れば、今年 5 月に亡くなった神経生物学者ジェラルド・エーデルマン (Gerald M. Edelman, 1929-2014) の理論がある。博士は、抗体の化学構造を決定した業績により 1972 年にノーベル賞を受賞した後、神経科学の領域に進んだ方である。その研究によると、意識には世界に存在するものを感じ取る知覚による一次意識 (primary/sensory consciousness) と、意識していることを意識するというより高次の二次意識 (secondary/higher order consciousness) の二つのレベルがあるとされている。一次意識は外界に反応するところで留まる世界で、現在とせいぜい直近の過去だけが関わるものであるのに対し、二次意識では反応していることについて振り返る作業が入るため、過去や未来も絡み合ってくる。つまり、一次意識のレベルに留まる限り現在の奴隷であるが、二次意識に入ることにより囚われの身から解放されるとも言えるだろう。さらに重要なことは、意識の発生は自然選択による進化の産物であるとされていることである。二次意識に至ることがわれわれの生存にとって不可欠だということになる。一次意識と二次意識に対応するような認識は古代ギリシャの時代からあり、例えばアリストテレス (Aristotle, 384 BC-322 BC) は感覚による受容と想像との間にある違いに気付いていた。その上で、受容は常に正しいが、想像は誤ることがあると考えていた。また、ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) は直接的な知覚や直観によっては真理を認識できず、ただ思惟の努力によってのみ真理に至ることができると考えていたことから意識の二つのレベルを明確に区別していたことが分かる。

エーデルマンの弟子であるジュリオ・トノニ (Giulio Tononi) 博士は、意識の情報統合理論 (integrated information theory) を提唱している。この理論によれば、無意識とは多数の情報が無関係に独立に存在している状態を言い、意識とは豊富な情報が一つに統合された構造を持つ状態だという。換言すれば、知識がバラバラに存在している状態は意識がない状態で、それぞれの知識を意味のある纏まりにすることが出来て初めて意識を持つことになる。溢れる情報を追いかけるだけの状態は、一見生きているようには見えるもののその意識は眠りの段階にしかないことになる。トノニ博士による無意識と意識、そしてエーデルマン博士による二つの意識のレベルについて想像を膨らませていると、これら二つの状態が仏教的な世界と DALF 的世界に対応しているように見えてくるから不思議である。

フランス現代の哲学者ミシェル・セール (Michel Serres, 1930-) 氏は、ある講演の中で興味深いエピソードを紹介している。時は 3 世紀のパリ。パリのディオニュシウス

(Dionysius, ? - c. 250) と呼ばれるパリの初代司祭サン・ドニ (St. Denis) が異教を広めた首途でモンマルトル (Montmartre : mont des martyrs = 「殉教者の丘」に由来) で首を刎ねられるが、その時に奇跡が起こり、直線距離で 6 km はあるだろうサン・ドニ大聖堂 (Basilique de Saint-Denis) のところまで自らの頭を持って歩いて行ったという伝説である。セール氏によれば、現代人の状況はまさにサン・ドニの頭と同じではないかということになる。切り落とされた頭をパソコンなどに準え、われわれは毎日自らの頭を目の前に置き、向き合いながら暮らしている。しかし、人間に特有な「考える」という脳機能も体から切り離されていると言うのである。この先を敷衍すれば、こうなるだろう。事実や知識はすべて目の前に蓄えられている。事実を知りたければそこに行けばよいだけである。事実だけを扱うためにわれわれの脳を使うことにどれほどの意味があるだろうか。そうではなく、蓄えられた目の前にある事実について振り返り、雑然と並んだ事実を繋ぎ合せ、新しい考えをそこから紡ぎ出すことこそ、われわれの脳が本来持っている機能を十全に発揮させることではないのか。このような視点から今の世の中を眺めてみると、セール氏の指摘に頷かざるを得ない現象が次々に浮かんでくる。

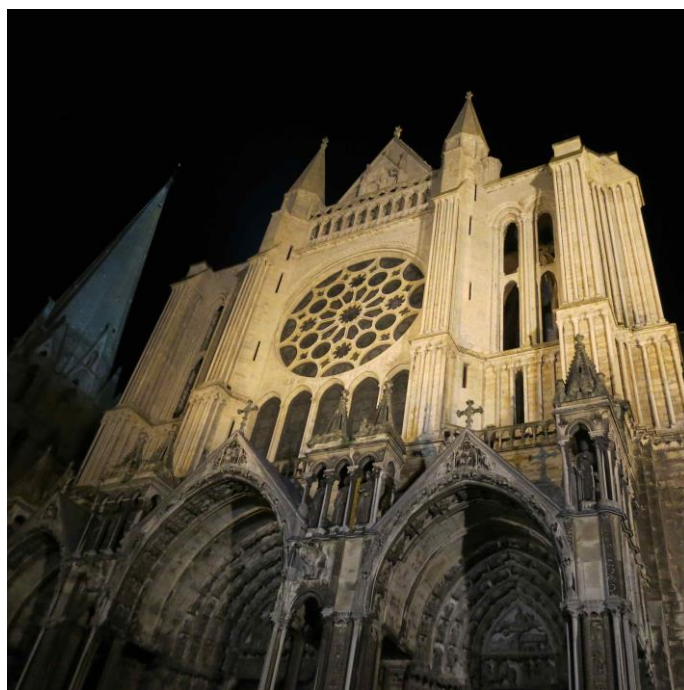


パリのノートルダム大聖堂のサン・ドニ(中央)

© Ecole Elémentaire d' Application Lazare Carnot - 92700 Colombes

ところで、今回のエピグラフの主、小林秀雄 (1902-1983) は「考える」ことをどう

考えていたのだろうか。本居宣長（1730-1801）を引いて「考える」ことについて語っているところがある。「考える」の古い形は「かむかふ」で、「か」には特別の意味はなく、「む」は「み」で自分の身、「かふ」は「交わる」こと。宣長によれば、「考える」とは自分が身を以って相手と交わること、つきあうことになる。「考える」ということは、対象をどこかに置き、それを観察することではなく、対象とわたしとがある親密な関係へと入り込むことだ、と小林は言っている。対象が自己であれ、自己の外にあるものであれ、対象に纏わる記憶をできるだけ多く引き出し、それらと親しく付き合うことが「考える」ことの第一歩になる、と言っているようにわたしには見える。今、今年二度目になるシャルトルに入り、「考える」ことについての最初の試みの結果が今後どのような変容を見せるのか、そのことに興味が湧いている。



夜のシャルトル大聖堂南門

(2014年12月7日)

(2014年12月8日)